

阪 神 大 震 災

私たちが語る

5年目

阪神大震災を記録しつづける会
編

阪 神 大 震 災

私たちが語る

5年目

阪神大震災を記録しつづける会
編

阪神大震災 私たちが語る5年目

1999年7月30日 第1刷発行

編者・発行者 阪神大震災を記録しつづける会
〒650-0033 神戸市中央区江戸町98番地の1
東町・江戸町ビル3階10号
日本出版企画(株)内
Tel. 078-327-3950 Fax. 078-327-3951

制作・発売 神戸新聞総合出版センター
〒650-0044 神戸市中央区東川崎町1-5-7
神戸情報文化ビル9F
Tel. 078-362-7138 Fax. 078-361-7552

印刷 株式会社 トライス

乱丁・落丁本はお取り替え致します。
©阪神大震災を記録しつづける会 Printed in Japan. 1999

まえがきーいつの日か

「今度、震災を担当することになりました」

昨年に神戸支局に転勤した記者から連絡があった。

彼が新聞記者になったのは震災以後だ。現場を体験していない記者が増えている。震災報道は第二世代に入った。

「熱しやすく冷めやすい」と言われるマスコミだが、震災報道は粘り強く続けている。これだけ長期間、担当記者を置いて継続取材させることはまれだ。

しかし、被災地と遠隔地との温度差は確実に広がっている。「一・一七」に震災以外の記事をトッブにすえた東京の新聞もある。

「ニュースでなくなる日」は、それほど先ではないかもしれない。

朝日新聞の記事データベースで調べてみた。

ことし五月十日まで、「阪神大震災」を扱った記事は二万八千八十二本にのぼる。地震発生直後は「阪神大震災」という呼び方はしておらず、最初にこの言葉が紙面に登場したのは一九九五年一月十九日だ。

その後、
九五年 一四三二一本
九六年 五六五〇本
九七年 四一三三本
九八年 二九六〇本
九九年 一〇一八本
と続いている。

九九年はまだ途中だが、記事は減り続けている。しかも、年月を経るに従って、大阪本社版の記事が目立つ。全国紙だが、東京近辺で配られる紙面には載っていないケースが多い。

さらに、これらの記事の中で、「風化」という言葉が含まれている記事を検索してみた。

九五年 三六本
九六年 五六本
九七年 六二本
九八年 六四本
九九年 四八本

「風化」というキーワードには、「風化を防ぐ」という趣旨の記事も含まれているので、一概に判断はできない。しかし、まだ五カ月しかたっていないのに、九九年の記事本数の多さが気にかかる。「風

化「元年」になる予感さえする。

また、「阪神大震災」がどのくらい社説で取り上げられたかを調べてみた。

九五年 一〇一本

九六年 一九本

九七年 一五本

九八年 八本

九九年 三本

説明はいらないだろう。

いつの日か「阪神大震災関連の記事はありません」となるのだろうか。

この体験記も第五集となった。

記録し続けることの重みを、改めてかみしめている。

一九九九年五月

阪神大震災を記録しつづける会

編集総括

小橋 繁好

おへじ

まえがきーいつの日か

小橋 繁好……………1

一 支え

語らいの後に

赤西 裕之……………12

ひなげしの花

東條 健司……………15

医師のボランティア日記

湊 健児……………18

語り部

西田 公夫……………21

被災地の下呂温泉

中島 由博……………25

歯車

岡本 美紀……………28

無償の責任

山中 敏夫……………31

四年前の受験生たち

野口 元子……………36

生きる希望

清重 智子……………39

「鳥の歌」

川端 充宗……………42

遊びを届けよう

岡部 秀夫……………46

よろずボランティア

西尾 定久……………49

畳六百枚

岡田 智晶……………52

在宅介護

中井 貴美江……………55

二 住み家

解体工事

精一杯

当選通知

四年がかり

ひび割れ

瓦礫

仮設住宅の生活記録

三 共に生きる

伯母の旧姓

千歳飴

娘への手紙

私の十大ニュース

母の死

妻への供養

運命

藤原 恵美子

匿名・女性

網 哲男

徳島 喜代子

小樽 千恵子

大仁 節子

佐藤 一志

芳崎 洋子

元橋 紀久子

山中 隆太

匿名・女性

森 美佐子

藤田 定義

匿名・女性

60

63

66

70

73

77

81

86

89

92

95

99

102

104

満ち足りて
輝く子供たち
学年だより
リストラ
たんす
スケープゴート

四 心

おっちゃん
これでいいのだ
孤独
敷き布団
震災とストレス
告白
父のうつ病
三回忌
娘の腕時計

大堀 美重子 107
批 榔 妙子 110
長谷川 美也子 113
匿名・男性 116
稲垣 暁 120
山根 洋子 124

後藤 妙子 130
加藤 克信 133
川 畑 守 136
北川 京子 139
匿名・女性 142
若松 貴也 146
高杉 智子 148
森 啓和 151
三川 範彦 155

二十一世紀へ

拒絶反応

夫の変調

五 遠く離れて

「これがカリフォルニアよ」

元兵曹がみた震災

夜景

一日の違い

被災を免れた者の証言

六 あの日から

寅地蔵

百五十冊

片足の馬拉ソランナー

立候補宣言

在日一世

尾崎

淳二

近田

育美

岩崎

美代子

根本

正枝

大橋

光正

築地原

三紀子

宗安

美幸

名児耶

貴之

中村

専一

北村

幸男

白倉

貴子

守田

基師子

高

奉淀

157

160

163

168

170

174

177

180

186

190

193

195

198

鳴き声

ある被害

震災から

まさかの時に

言葉

各賞選考委員座談会

あとがき―だまし絵

渡邊 芳一

池田 美樹

二反田 静香

高島 節子

多田 とし子

高森 一徳

(投稿者の氏名、年齢、職業は投稿時)

202

204

207

210

213

217

260

一
支え

語らいの後に

赤西 裕之（三十八歳 会社員 西宮市）

「えっ、まだボランティア続けとんか？」

大阪在住の友人は不思議そうな顔で私に言った。震災から四年、その間、被災者は避難所から仮設住宅へ、そして恒久住宅へと移り、ボランティア達は形を変え、そして激減した。現在（平成十一年一月時点）、被災地で活動するボランティアは一日当たり数百人と聞く。「四年たつて、どんな事しとんねん？」友人は続けた。私が「仮設住宅で主に高齢者の話し相手やけどな」と答えると、「話し相手か、ふーん」と分かった様な分からない様な顔をした。

「活動は話し相手です」と聞けば、訪問して、相手と話をしてそれで終わりと思われるかもしれないが、実際は「話し終えた時点」から始まることが多いのだ。それは、今後のボランティア活動のヒントを得たり、高齢化社会における問題点を見出したりする事もあれば、時には自分自身の持つ可能性を発見したりする事もあった。

被災者の抱える問題点の解決の入り口になる事があるかと思えば、更に別の問題が見えてくることもある。

私がこのボランティアに初めて参加したのは震災の年の六月からである。新聞の「ボランティア募集記事」を見て決心したのであるが、その当時の活動内容は「仮設住宅での草抜きと住民への支

援」と記載されていた。それが今、なぜ「話し相手」なのか。これまでの軌跡をたどってみよう。

〈一年目（平成七年）〉

「草抜きなら私でも出来る」。そう思つて第一歩を踏み出した。ただ、住民に対する支援ではとまどうことが多かった。周囲のメンバーも私と同じく「ボランティア初心者」が大半であつた。仮設住宅を一軒ずつ訪問しながら、決められた時間内でいかに多く訪問するかに氣をとられ、いつも焦つていた。

当時の仮設住宅は、入り口の段差が解消されていなかったり、設備面での問題も多く、私達が訪問しても、その場で対応できないことが多かった。

〈二年目（平成八年）〉

グループの方針は、「一軒でも多く訪問」する事だけにとられず、必要があれば部屋でじっくり話を聞く態勢へと変わりつつあつた。今の原型が出来たのであるが、問題も多かった。ある一人暮らしの高齢者（女性）を訪問したとき、帰り際に「今日は沢山話が出来て楽しかったよ。でもお兄ちゃん達が帰ったらまた寂しい生活に戻るのか」と言われドキッとした。一回きりの訪問ではなく、個別に再訪問する必要性を感じ、私個人での再訪問を始めた。私達のボランティアは基本的に毎週土曜日に活動していたので、日曜、祝日等の何日かを個人訪問日とした。

〈三年目（平成九年）〉

仮設住宅の入住率は未だ六割程であつたがボランティアへの参加人数がかなり減少してしまつた。

再訪問や住民への伝達等が思うように行かず、訪問先で、「訪問に来ても後は放つたらかしにするんやったら、もう何も話す事ないわ!」とどやされる事もあった。

〈四年目（平成十年）〉

復興公営住宅の完成が相次ぎ、仮設住宅の入居率が大幅に低下した。半面移転先が決まらない方の焦燥感が増し、「心のケア」の問題が更に大きく取り上げられた。今迄個別訪問していた方は公営住宅入居後も訪問を続けている。仮設後の新しいコミュニティ作りで悩んでおられる方も多い。もはや被災者へのボランティアという感覚ではなく、広い意味での「高齢化社会におけるボランティアの可能性」について考え始めた。

〈五年目（平成十一年）そして今後〉

□達者でもなく、何の特技もない私にも話を聞いて、うなずき、多少の感想を述べるだけの技術があったことに気づいた。この四年間、実に多くの話を聞いた。震災直後から今日までの歩み、戦中戦後の苦労、過去の武勇伝、人間関係の難しさ、新しい生活への不安など。これらの話を基に、新しい何かを築いていきたい。「人間が人間らしく生きるためには何が必要か」を痛い程知らされた被災者の声が「真の先進国」への原動力となる様に。